

自己の健康や生活習慣と向き合うきっかけに ～「人体実験レポート」の実践～

保健体育科 佐藤 健太

1. はじめに

保健の授業において、生徒が授業で得た知識や技能を自分の生活に取り入れたり、活用したりすることで自らの健康を保持増進していく姿勢が求められる。そこで、健康的な生活を“実践”することに焦点を当て、自己の健康生活や生活習慣・ライフスタイルに目を向けさせるために、そして自身の抱える健康課題を解決する手立てとして、「人体実験レポート」課題の実践に行き着いた。本課題への取り組みが生徒にとってどんな影響を及ぼしたのか、これまでの実践をまとめるとともに成果及び今後の課題と展望について発表を行った。

2. 発表要旨

まず、本課題を行うきっかけと課題の概要を説明した。自身のカラダを使った実験なら何でもよいこと、最低3週間継続すること、お金をかけずに時間をかけること、結果は正直にありのままを報告すること、レポートの形式は特に定めないことなど、できるだけシンプルに細かいルールを設けず、生徒の自由な発想で実験・レポートを行わせていることを述べた。実際に生徒のレポート作品を複数回覧してもらい、実験内容・方法、レポートのまとめ方等を参考にしてもらった。実験はジャンルの豊富さ、内容の面白さ、レポートの形態や工夫された表現方法について、興味深くレポートを眺めている様子だった。次に、そのレポートをもとに発表会を実施したことを報告した。まず類似したテーマごとにグループ内で発表を行い、生徒同士で相互評価をし合い、最も評価の高かったレポートは再度、全員の前で発表させた。

本課題後の生徒の意見や感想には、「セルフコントロール」「継続性」といったキーワードが多くみられ、「自身のカラダへの気付きや変化を大切にしたい」という声が目立ったこと、また発表活動を行うことで他者との比較や情報の共有を図ることができ、実験を行ってレポートにまとめるだけでは得られない効果・成果があったことも併せて報告した。今後の課題としては評価方法や生徒の負担増への対策、展望としてSGHを視野に入れた探究活動への発展を挙げ、発表を締めくくった。

3. 質疑応答

質疑応答では、レポートの形態を電子化した方がまとめやすいのではないかという意見の他、事前指導をどのように行ったかという質問が挙がった。あくまでも生徒の自由な発想や表現の主体性を尊重していることを改めて主張した。保健の授業にとどまらず、総合的な学習の時間での活用も期待できそうだと意見も頂戴した。